

巻 頭 言

大学院実践真宗学研究科長

龍 溪 章 雄

龍谷大学大学院実践真宗学研究科は、龍谷大学の建学の精神である浄土真宗の精神（阿弥陀仏の誓願）に立脚しつつ、21世紀の混迷する現代社会のさまざまな課題や要請、現代人の本音、^{なま}生の声に一人の人間として正直・誠実に応答し、宗教実践と社会実践にかかわる高度なスキルの修得に基づき人生の確かな羅針盤を直接もしくは間接に提供することの出来る、願いと情熱と勇気ある宗教的实践者を養成するという教育理念・目的のもと、2009年度に開設され、今6年が過ぎようとしています。

この間、学内の自己点検評価、また大学基準協会の認証評価を受けるなど、教育理念・目的、そしていわゆる3つのポリシー（CP, DP, AP）の点検と改善に努めてきました。そして、2014年度、そうした点検と改善を踏まえて、今私たちが置かれているこの時代の願いに真摯に傾聴し、社会的要請に応答すべく、社会実践活動分野にかかわるカリキュラムの中に「臨床宗教師研修」プログラムを立ち上げ、「こころのケア」を実践する日本版チャプレンの育成をスタートさせました。これは、とくに東北大学大学院実践宗教学寄附講座、並びに関係諸先生の全面的ご協力ご支援の賜物であります。

かつて20世紀が幕を下ろす当時、やがて到来する新しい21世紀の時代に期待をかけた人々も多くおられたことと思います。しかし、今日、あらゆる方面で、人間が一人のかけがえのない人生といのちを完全燃焼して行くには困難な、息苦しい複雑な状況を呈しつつあります。かつて私自身学生時代に学んだフランクルの「ホモパシエンス」（苦悩する人）、そして親鸞聖人が大乘仏典に拠って語られた「群生海」「群萌」、こうした言葉が21世紀的な実態をもって迫ってく

ることを感じずにいられません。とくに、2011年3月11日の東日本大震災以降、多くの方々が、いまだに心身両面にわたって苦悩されています。いわゆる宗教の社会貢献、公共性が求められる現在、そうした現代社会に生きる人々に、その一人でもある宗教者は、今、何が出来るのか。宗教者に求められているものとは何であるのか。私ども実践真宗学研究科に籍を置き、研究し、学ぶ者として、これは現代から問いかけられている切実な課題であります。

宗教者として、一方では、仏教が蓄積してきた伝統の中から現代に受け継ぐべきDNAを正確に学びつつ、他方で、伝統という名の鎧を思いきって脱ぎ捨て、時代の声に虚心坦懐に耳を傾け、建学の精神でもある阿弥陀仏の誓願（願い）が「伝わる」こと、そして悲しみと苦悩の中にある人々に「寄り添う」こと、これら両面にわたって応答していくこと。そうした私どもの学びと実践のベクトルを宗教実践・社会実践の各分野で探究し、確認していく自己点検の歩みには、さらなる研鑽と精進が求められてくるでしょう。

2015年度からは、社会実践活動分野における上記プログラムをさらに一步展開させ、特定の宗教・宗派を超えて広く社会人の方々にも受講してもらえようにしました。「公共空間」での実践は、「臨床宗教師」本来の在り方です。その趣旨をよりいっそう具現化するために、文字どおり、「衣を脱いで」、歩んでいくこととなりました。

この【紀要】もこれが第3号となります。当研究科の活動内容、院生諸氏の「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」の個性ある弛みない研鑽の成果の一端をご報告できますこと、嬉しく思いますとともに、特別講義、公開シンポジウムでお世話になった先生方、学内外の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。学術雑誌としてのクオリティーをさらに高めていく所存であります。

末尾ながら、当研究科開設以来、6年間にわたって実習助手として研究科の発展、院生の教育指導等に熱意をもって尽力してこられた堀靖史先生が、本年度末でご退職になります。この場を借りて、御礼申し上げる次第です。